

ほんとの空へ・お〜い福島:震災の記録、志を生かそう＝冠木雅夫 / 福島

2012.02.04 地方版／福島 21頁 写真有 (全1,185字)



福島の現実は一筋縄ではいかない。原発事故との闘いは続いている。まだ振り返る余裕はないという人も多いだろう。だが一方で、だからこそ記録をするという人もいる。このところ福島での体験の記録が次々に本になっているのに気がついた。そんな中で興味深かった3冊を紹介したい。

まず若手医師による「南相馬10日間の救命医療」(太田圭祐著、時事通信社)。

南相馬市立総合病院は相双地区で唯一、脳外科疾患の入院対応ができる病院だが、脳外科医は副院長と応援の太田さん(著者)だけだった。最初は地震による負傷者、さらに津波による溺水者、低体温患者が次々に運び込まれ野戦病院のような状態になる。

ほど近い高齢者介護施設「ヨッシーランド」からは泥まみれの高齢者が次々に運ばれてきた。恐怖で叫び声を上げる人もおり、すでに亡くなっている人もあった。

読みながら7月末に訪れたこの施設を思い出した。中はすっかり片付けられ、壁の時計が被災時刻で止まっていたのが印象に残っている。

病院の闘いはまだ序の口だった。原発事故というさらなる危機が訪れる。原発は23キロ先。患者の転院やスタッフの自主避難など苦闘が続く。

著者は31歳、妊娠中の妻を名古屋に残しての単身赴任である。<妻や家族のことが頭から離れず、「逃げなければ」という意識と「逃げてしまってもいいのか」という罪悪感とで葛藤していた>という。上司の勧めを断って残留。本の元になる記録を書き始めたのは<自分の身勝手に残ることを決めたこの時から、家族のために何か残しておきたい>と思ったからだ。

太田さんはその後生まれた息子を「そうま」と名付けた。南相馬の復興と地域医療の再生を願ってのことである。

あとの2冊は詳述する余裕がない。「@Fukushima 私たちの望むものは」(高田昌幸編、産学社)。元大熊町長の志賀秀明さん、いわき市の旅館経営、織内益信さん、二本松市の第七酒造社長、太田英晴さん、福島第2原発建設の反対運動をリードした立命館大名誉教授の安齋育郎さんら、名を並べただけでその幅広さが分かる34人からの聞き書き集である。最後は「フラガール3・11 つながる絆」(清水一利著、講談社)。たまたまスパリゾートハワイアンズに滞在中に震災に遭遇、客への親身の対応に感心したという著者によるドキュメントだ。

記録を残す動機はさまざまだが、福島復興につなげてほしいという願いは共通している。その志を生かしたい。(毎週土曜日掲載)

■人物略歴

◇かぶき・まさお

1951年喜多方市生まれ。同市立第二小、同第一中、喜多方高、東大卒。75年毎日新聞社入社。千葉支局を振り出しに学芸部長、編成総センター室長、新聞研究本部長、論説委員長を経て11年10月から専門編集委員。7月から「きたかた大使」。